



(愛称は「ちがさき丸ごと博物館」)



茅ヶ崎からの富士山

1. はじめに (写真と文：秋山晃三さん 市内で22年富士山を観測されてきた白浜町在住の方)

東京にいた知人が茅ヶ崎のマンションに引っ越した。彼の第一声は「俺の今度のマンションの廊下側の窓から富士山が見えるんだ！」であった。お正月、箱根駅伝の実況テレビを見ていた九州の友人が電話を掛けてきた。「茅ヶ崎からの富士山はきれいだね！いいところに住んでいるね！」と。関西からやってきた別の友人は「今日は新幹線から富士山が見えてラッキー」と言って挨拶した・・・。

富士山をめぐる、このようなごく日常的なやり取りの経験をお持ちの方は沢山いらっしゃると思う。日本一の山。世界一の単独峰。日本の国のランドマーク。富士山は単純に「それが見えただけで嬉しい山」だ。「富士見」「富士見町」「富士見台」「富士見が丘」という町名が関東一円の各県や、静岡・愛知県に至るまで分布している。これらは、自分の住んでいる町から「富士山が見える」という「嬉しさ、誇らしさ」の気持ちが町名に表れている証だと思うのだが、如何であろうか。

2. 茅ヶ崎からの富士山

ご承知のように、茅ヶ崎にも「富士見町」がある。だが、茅ヶ崎からの富士山は、「富士見町」の独占ではない。茅ヶ崎からの富士山は日常の生活に溶け込んでいるのが特徴だ。道を歩いていて、ちょっとした弾みに向こうの家の屋根の上に富士山の頭を見たとか、或いは車を運転していて、道の真正面に富士山を見たとか、朝、雨戸を開けたら富士山が見えたとかの経験をお持ちの方が茅ヶ崎には多いはずである。



茅ヶ崎海岸(ヘッドランド)からの眺望(11月)

このように、茅ヶ崎からの富士山はごく日常的に天気さえよければ、どこからでも見えることが特徴である。これが東京あたりではそうは行かない。「富士見町」と立派な町名があっても、ビルが建ち、道が複雑に曲がりくねる町並みでは、余程高い物見台とか高層建築の屋上にでも上がらないと見えなくなっている。富士山は茅ヶ崎のほぼ真西に位置するが、厳密には、海岸線辺りで4°、香川辺りで3°、富士山の頂上視線は緯線よりも北側にずれている。

それ故、例えば、ほぼ東西に貫通する鉄砲道でも、殆どのところで富士山は頂上がチラチラと見えるだけなのに、中海岸二丁目あたりでは圧倒的な壁のように立ちふさがる富士山を見ることになる。西湘バイパスもそうだ。ヘッドランドを超えたあたりから、道の真正面に見る富士山の美しさは何度見ても見飽きず、誰も歓声を上げる。堤坂下の交差点を少し東に入った駒寄川沿いの道からの富士山も、氷室椿園近くの東海岸南二丁目からの眺めも、この僅か4°の道の傾きのお陰である。こういう場所が茅ヶ崎にはいっぱいあるのだ。

3. 富士山のバリエーション

私は、富士山の観察を始めてから22年になる。と言っても大したことはない。朝起きて雨戸を開ける。天気がよければ富士山が見える。富士山が見えた日にはカレンダーに印をつけるという単純なことをやってきただけだ。だが20年以上も続けると、こんな簡単なことでも色々な発見があって面白い。例えば年間の「朝の富士見デー」は平均約90日である。朝見えなくても夕方見えることもあり、これを入れると100日程度になるらしいが、私はこちらのデータは持っていない。

富士山の見え方には色々なバリエーションがある。一番分かりやすいのは冠雪の多少である。夏は全山雪がなく黒々と「ぬおー」とした姿を見せる。12～1月が最も綺麗で「絵に描いたような姿」になる。春一番が吹いたあとには南側にも積雪があり、全山真っ白になる。海岸から見る富士山は、海の青さ・空の青さとのコントラストが素晴らしい。

芹沢の腰掛神社からの富士山は、谷戸の田んぼの里山からの代表的英姿である。国道1号線の鳥井戸橋付近（鶴嶺八幡宮の赤鳥居のあたり）からは「左富士」が見える。富士山は東海道の北側にあるので、通常は京都に向かって右側に富士山が見えるのだが、道の海側に見える茅ヶ崎の「左富士」は東海道五十三次の楽しみの一つであったに違いない。



富士山バリエーションといえば、今にも雨が降りそうな曇天なのに、富士山だけはスカッとその全容を見せる時がある。それとは別に、めったに見られない大自然のショーは「ダイヤモンド富士」だ。残念ながら私は22年間、一度も見ていない。朝日に映える「赤富士」、夕日に浮き出される「シルエット富士」、ジェット機が残す飛行雲が突き刺さる「ジェット富士」……。春夏秋冬、富士山は毎日表情を変えながら茅ヶ崎の市民に姿を見せるのだ。富士山は茅ヶ崎の山でもなければ神奈川県の上でもない。にも拘らず、やっぱり「それが見えるだけで嬉しい山」である。

4. 終わりに

茅ヶ崎からの富士山の眺めは、住民に喜びを与える。人々に希望をもたらす。富士山を描いたもので、葛飾北斎の「富嶽三十六景」は有名だ。中でも「神奈川冲浪裏」と赤富士の「凱風快晴」は東京国立博物館の至宝である。時代を超え所を越えて人々に共感と感動を与えてきた。私たち茅ヶ崎市民は、贅沢にもその「なまの姿」をいつでもどこからでも味わうことが出来る。その感動を、住民共通の至宝として世代を超えて伝えていきたいものである。

発見！茅ヶ崎の舟板塀



この舟板塀はラチエン通りを海の方に向かい、開高健記念館を過ぎて、少し先の海岸近くの右手にある。昔、某家の塀であったがマンション建設時に長さが半分程度になり、今に残されている。舟釘や虫食いの跡も鮮やかであるが誠に見事な舟板塀である。これもきっと茅ヶ崎のお宝に違いない。時間が持てるようになったら是非その由来を調べて見たいと思っている。ラチエン通り経由海岸付近を散策される方は是非一度ご覧になって頂きたい。

(写真と文:加藤幹雄さん)

舟板塀は近江商人発祥の地、近江八幡・日野・長浜あたりや大垣市にある旧大垣藩戸田邸が有名である。ご存知の方もおられると思うが実は茅ヶ崎にも立派な舟板塀がある。私がこの舟板塀と初めて出あったのは今から約30年程前、茅ヶ崎に引越して来たすぐのこと、子供を連れて海水浴に行く時、目にした。当時は「風格のある大きな瓦塀だ」ぐらいにしか思っていなかった。それが今から5年ほど前、丸ごと博物館ガイド養成講座で海岸付近を探訪した際、講師の方から舟板塀と教えられた。その舟板の厚さは半端ではないし、頑丈な面構えは幾多の合戦を経験して、なお毅然として生きる古武士の風格がある。琵琶湖あたりの舟板とは違い、外洋の荒波に耐え抜いたつわものに違いないと一人で納得している。



発見！茅ヶ崎のグラフィティ・アート

(写真と文:川合重貞さん、小林智子さん)

みなさん、グラフィティ・アート（以下アート）というと耳慣れない言葉で、なんだろうと思われる方が居られることだろう。これから紹介するが、「これだったら見たことがある」と言われる方は多いと思う。地下道や高架道路の脚などに醜い落書きが書いてあるところが茅ヶ崎でも近頃増えている。それで、市の道路管理課他とNPO法人などの市内の団体さんが協働で、落書き防止のため、ここ数年の間にアートを描いた所が茅ヶ崎にも数カ所ある。アートを描くことによって、『自分より上手い絵のうえには落書きをしない』といった暗黙の了解があるそうで、この心理を利用して落書きを防ぐのである。

<1>茅ヶ崎ツインウェイヴ



市役所道路管理課が行政型協働推進事業として「茅ヶ崎の未来を考える会」と協働でできたプロジェクト。壁画は茅ヶ崎市をイメージするものであり、アーティストかおかおパンダさんとエメロード商店会や自治会が相談してイメージをつめた。梅田中学・小の子供達約70人と壁画制作するイベントが開かれ子供達は茅ヶ崎のイメージにあわせて水の泡に各々自分の絵を描いた。

<2>サザンビーチちか道

市役所産業振興課と社団法人茅ヶ崎青年会議所（JC）の協働でできたプロジェクト。海水浴場のイベントの一つとして未来と場所をイメージし、市内小学生公募に募集した生徒たちの手形のタイルを張り付けた。



<3>前の田跨道橋

（一中通りから国道一号線を越えて続く県道と海前寺の北隣りの未舗装道路とが交差する地下道）



市役所道路管理課とNPO湘南スタイルとの協働プロジェクト。描き手さんには場所にふさわしい絵をと注文したとのこと。

<4>汐見台地下道

前の田跨道橋と同様、市役所道路管理課とNPO湘南スタイルとの協働プロジェクトで、描き手さんには場所にふさわしい絵をと注文したとのこと。子どもの水遊び、魚など、それに1,386,000,000km³ これは何なの？と悩ませる数字まで描かれている。



さて、みなさん、散歩の途中にこれらのアートを見つけたらじっくり鑑賞しよう。そして、紹介したこれらのアートを見るために、日頃の散歩コースを延長したり、変更したりして、探索されてはいかがだろうか。

ちがさき丸ごとふるさと発見博物館の会 昨年の主な活動

イベント名（実施日：依頼先・協働）	概要	対象
親子で体験学習（8/29）	旧和田家住宅周辺の探索と昔の暮らし体験	小学生とその家族
歴史と食と観光（10/3：神奈川移動大学）	浄見寺・旧和田家住宅と周辺のガイド	一般、学生、教授
浜風に吹かれて（10/9：小和田公民館）	団十郎の碑—サイクリングロード—平和学園	小和田自治会
環境関連公共施設見学ガイド支援（10/20他5回：秘書広報課）	下水処理施設—県衛生研究所—資源物選別所—清掃事業所などのコースをめぐる間のガイド	中海岸自治会他5自治会
漁師さんのお話を聞く（11/6）	漁業協同組合長さん他の茅ヶ崎漁業のお話	丸ごと博物館の会
文人・演劇人が愛した町を訪ねて（12/4：文教大学）	海岸地区（美術館—開高健記念館）のガイド	学会参加者
茅ヶ崎の別荘文化と海岸を訪ねる（1/14：寒川町公民館）	団十郎別荘跡—松が丘緑地—氷室椿庭園—高砂緑地のガイド	寒川公民館職員
JR駅からハイキング（1/30：JR東日本&相鉄）	腰掛神社周辺のガイド	一般（1000名）
ピストン堀口道場&弓道場訪問（2/12）	ボクシングと弓を射るスポーツを身近な道場で見学	一般

郷土のまち茅ヶ崎ゆかりの読み物紹介コーナー

①「鵜沼・東屋旅館物語」 高三啓輔著 博文館新社

著者は新聞記者。明治期結核多発にともなう湘南海岸一帯のサナトリウム・海水浴化と貴顕高官による別荘文化の発生という相模湾の歴史を、その舞台の中心の一つともなった鵜沼・東屋旅館を舞台として幾多の文化人たちの織りなす断片を諸資料・取材を駆使して、私たちに提示して余すところがない秀逸な本です。もちろん茅ヶ崎にも触れてあり、この分野の知識を豊かにしてくれることは間違いありません。是非読んでいただきたい本です。

②「茅ヶ崎だより」 松本賢治著 紙碑之会

著者は茅ヶ崎在住の大学の先生。前半は茅ヶ崎の東の山側の散歩随筆、中から後半にかけて旅先の文など簡潔な文体で描かれていてなかなか味わいのある本です。

ちがさき丸ごとふるさと発見博物館て何？

茅ヶ崎市の全域を屋根も壁もない博物館と見立てて、文化、歴史、自然、産業、商業、公共施設、人材など、このまちらしさをもついろいろな事柄を幅広く選び出し、これらを都市資源と呼ぶことにしました。これらの都市資源を調査・研究し、それぞれがもっている意味や魅力を広く市民に周知する一方、それぞれを関連付けて散策や各種イベントなどで活用を図ることにより、本市を改めて知り、本市を愛する心を育み、ひいてはまち全体の活性化を図ろうとするものです。そして、都市資源は地域のかげがえのない宝物として、地域により保護され育てられていくこととなります。住民が、自分たちの地域の未来のために、自分たちの考えと力で運営していく姿勢を特に重要視しています。

編集後記

この間「新年のご挨拶」を申し上げたと思ったら もう4月春号の話しで追い立てられています。今回はお馴染みの「富士」をこよなく愛する秋山さんからの寄稿記事と、普段何気なく見ているけど見過ごしている舟板堀や街角アートを採り上げてみました。いろんなところに「街のお宝」はあるんですね。今後とも 新鮮で楽しく、ミスのない誌面を目指します。
(編集長:富永、編集委員：川合、小林(智)、小林(信)、高橋(正)、増田)

発行・編集 ちがさき丸ごとふるさと発見博物館 季刊誌編集委員会 (印刷協力 湘南ちがさき屋)
〒253-8686 茅ヶ崎市茅ヶ崎1-1-1 茅ヶ崎市教育委員会教育推進部 社会教育課文化財保護担当
Tel 0467-82-1111内線3342 E-mail: shakaikyoiiku@city.chigasaki.kanagawa.jp